

氏を冒した。天正の初瀧川一益に屬し、一益の歿後豊臣秀次に仕へて從五位下刑部少輔に叙任し、采地六千六百石を受けた。次いで秀次の滅後越前の長谷川秀一・尾張の徳川忠吉に歴任し、慶長十四年六十三歳の時前田利長に來仕して祿二千石を受け、諱伴となつて高岡に居たが、幾くもなく利常に隸して千石を加へ、大坂冬陣には金澤に、夏陣には富山に留守し、元和三年に歿した。齡七十一。正勝馭術を能くし、俳歌を好み、指鼓の蘊奥を幸五郎次郎に受け、又林泉を愛し、草木花卉を植ゑて娯とした。その子孫數家に別れ、世々藩に仕へる。

**ツタマサクニ** 津田正邦 通稱玄蕃。文久元年前代修理正直の養嗣子として家を襲ぎ、祿壹萬石(内千五百石與力知)を受け、人持組に屬し、元治元年藩主前田齊泰に代つて入朝、仙洞御所を警衛し、慶應元年家老に列した。次いで明治元年越後戦争に、その手兵百六人を率ゐて出兵すべき命を受け、五月進んで越中高岡に藩陣したが、幾くもなく六月廿九日長岡に向かひ進軍し、之と同時に加賀藩兵の惣司となり、七月廿四日長岡城の一たび奪取せられ、廿九日官軍の之を回復するに至る間最も勇戦し、爲に八月九日藩侯前田慶寧から感状を得た。後陸奥に入つて各地に轉戦し、會津城陥落の報を聞いて兵を退け、十月廿四日金澤に凱旋、十二月廿八日慶寧から指料一腰・鞍置馬一疋・金子三千兩を賞賜せられた。後遠祖尾張守高經の氏を冒して斯波蕃と改め、三十三年五月十日功によつて男爵を授けられ、四十年三月九日六十五歳を以て歿。子忠三郎その後を襲いだ。

**ツタマサザネ** 津田正眞 通稱内藏助・玄蕃。正忠の嫡男、正保三年前田利常に仕へて千五百石を賜はり、父の歿後家を襲ぎ、その祿を還して配分知八千石を受け、寛文二年拜借銀奉行に任ぜられた。正眞人となり寛和、身を持する方正、讀書を好み、詩賦を作つて石川丈山を師とし、又書法を入幡山僧昭乘に受けて、善書の稱があつた。延寶三年歿。年五十八。

**ツタマサシゲ** 津田正重 通稱宇右衛門。實は川北道甫の子で、津田小平次與庵に養はれたもの。與庵は織田信長・徳川家康に仕へ、寛永八年歿した。正重、同十一年前田利常に來仕し、千石を受け、御先簡頭・御馬廻頭・御算用場奉行に歴任し、延寶八年二百石を加へ、元祿六年致仕して計齋と稱し、十五年五月十一日八十六歳を以て歿した。

**ツタマサタタ** 津田正忠 小字忠三郎、後玄蕃と稱し、刑部正勝の第二子。十四歳の時前田利常の近習となり、三百石を賜はり、大坂兩役に從軍して三百石を増し、元和三年父の歿後三千六百石を襲ぎ、寛永十九年小松に在つて宗門奉行となり、利常の寵遇厚く、權機に參與し、漸次祿一萬七千七百石に至り、万治三年八月六日歿した。年六十二。

**ツタマサチカ** 津田政隣 初諱正隣。通稱雄平・左近右衛門。父は正昌。明和申世祿七百石を襲ぎ、大小將組に列し、天明以後前田治脩及び齊廣に仕へて大小將番頭・歩頭・町奉行・大小將頭を経て馬廻頭に進み、宗門奉行を兼ね、職秩二百石を受け、文化十年十月罷め、翌年歿した。年五十九。政隣讀書を好み、文學があり、藩の沿革に關しては政隣記十一冊、耳目甄録二十冊の著がある。

**ツタマサナホ** 津田正直 通稱權平・修理。正矩の養子で、政隣の實子。天保十四年七月本家を繼ぎ、俸一萬石を受け、人持組に列した。

**ツタマサノリ** 津田正矩 通稱乙三郎。文政十二年父内藏助政本の遺知一萬石を襲ぎ、天保六年定火消役に任ぜられ、十三年歿した。  
**ツタマサモト** 津田政本 通稱玄蕃・修理。猪之助・内藏助。初諱正身。明和七年玄蕃正昭の遺知一萬石を襲ぎ、安永七年定火消、天明四年御家老に任じ、六年加判となり、文政十二年七月廿七日歿した。

**ツタマサユキ** 津田正移 通稱權佐。父正忠の第四子で、配分知七百石を受け、大小將に班し、貞享四年大小將番頭に任じ、元祿八年五十二歳を以て歿。正移より四代鍋四郎幼少で三の一を襲ぎ、明和四年十二月十五日早世して斷絶した。

**ツタマサヨシ** 津田正能 半丞と稱した。正忠の三男。父の歿後其の祿七百石を割いて賜はり、前田綱紀に仕へ、寛文中馬廻組又は大小將組に班し、延寶五年御使番、天和元年御先簡頭に累遷し、元祿四年歿した。

**ツタマサヨリ** 津田將順 通稱健五郎・玄蕃。寛保二年父玄蕃敬脩の遺知一萬石を襲ぎ、延享元年定火消に任じ、寶曆三年御免、八年七月四十二歳を以て歿した。  
**ツタミツヨシ** 津田光吉 通稱太郎兵衛。次郎左衛門千連の四子。寛文四年御書物役となつて新知百石を受け、九年御書物奉行に進み、延寶三年定番御馬廻に列し、七年五十石を加へ、前田綱紀の命を奉じ京都に於いて古

書珍籍を探ること多年に涉り、元祿十五年三月十七日六十八歳を以て歿した。

**ツタヤスキヨ** 津田保潔 通稱宇源次・伊兵衛。寛永二年父番之丞の配分知四百石を受け、漸く増して七百石に至り、元文二年更に百石を加へて寄合に列し、五年二百石を加へて人持となり、寶曆三年歿した。

**ツタヤスノブ** 津田安信 通稱數右衛門。延享二年養父新六郎の遺知二百石を襲ぎ、明和元年三月十一日閉門を命ぜられ、八月十四日歿して家斷絶した。四十一歳。

**ツタヤマシ** つた山石 能美郡鶴川から産する石材。石英粗面岩質凝灰岩で、淡青白色石基中に稍濃色の砂礫を混じ、質粗粒狀で少しく緻密である。

**ツタユキツラ** 津田千連 通稱主計・兵部。次郎左衛門。長意の子。初め前田利政に仕へ、その封を放たれて京師へ赴くに從うたが、近江坂本に至つて暇を興へられ、歸つて利長から五百石を受け、馬廻組に班した。後大坂兩役に從ひ、その後役には片桐市正邸下で第一つを獲、凱旋の後御小將番頭となり、寛永八年御使番に轉じ、十三年十二月十八日歿した。享年五十三。寛永紀閉の著がある。この嫡流は孫甚左衛門長之が元祿五年に自害するに及んで斷絶した。  
**ツタヨウ** 津田養 通稱太一・道乙・隨分齋・豹阿彌。諱は養又は合、字は合同・合大、築又は築嵩と號し、その居を昇元堂といひ、俳諧を蘭吏に學んで青野と號した。道順光明の二子で、別に家を分ちて本道の醫を業としたが、酒色に耽り、博奕を好み、明和五年齡廿七を以て上國に走り、業を大坂に開いた。